明和―享和期の大坂における墓碑探訪と「掃苔文化」

内海寧子

はじめに

江戸時代、寺社参詣や季節の花の名所を紹介するガイドブック「名所案内記」が数多く出版されるが、大坂においても名所案内記が多く刊行された。なかでも寛政期刊行の『摂津名所図会』、および安政年間に編纂された『摂津名所図会大成』は、近世後期の大坂における名所案内記として双璧といえる史料である。この『摂津名所図会大成』は、幕末の大坂出版界において、一般大衆の読書要求に応じつつ、芝居関係の書、諸書への挿絵・画図、重宝記・節用集類、名所図会、読本や洒落本・滑稽本、また教訓書の編述[1]といった多彩な文筆活動を行った戯作者・暁鐘成の手になるものである。同書には寺社などの名所が記されているが、寛政期刊行の『摂津名所図会』と比較すると大坂の著名人の墓碑が多く記されているのが特徴である。その意味で、鐘成がどのような人物を『摂津名所図会大成』という名所案内記に掲載すべき人物としたか、つまり、大坂という地域を代表する人物とみていたかということがうかがえる好資料といえる。また暁鐘成には、彼の編とされる『浪華名家墓所集』と題する写本が数種存在する。この『浪華名家墓所集』には儒家、俳諧師、書家、画家など文芸人を中心とした約三百七十名の忌日と墓所が記されており、『摂津名所図会大成』と同じく、どのような人物を取上げ、また、どのような目的でその忌日・墓所を記したのかうかがわれ、興味深い。『摂津名所図会大成』や『浪華名家墓所集』のような編纂物の存在は、当時、著名な人物の墓碑を訪れる行為、すなわち墓の前で故人を偲び、過去・歴史に思いを馳せる墓参りが根付いていたことを物語る。このような故人の遺徳を偲ぶ行為にともなう文化現象を、ここでは「掃苔文化」と名づける。

「掃苔（そうたい）」とは、日本国語大辞典（小学館）によれば「こけをきれいに取り去ること。転じて、墓まいり」とあり、墓参のことを意味する。墓参りといえば、忌日または盂蘭盆会や彼岸に、先祖や有縁の故人を追善供養するための墓参を思い浮かべるが、『東京掃苔録』（昭和十五年）序文に「故人を追慕し時代々々の世相にふれながら墓所を探るのは愉しい事である。偶々人が気づかなかったのを見出した時の忝なさは、探墓を経験した人のみがしる悦びである。また此処にある筈のが失はれてゐた時などは、僅に遺る故人の忍草が根こそぎ枯れた思ひで、何物にも譬へがたい寂しさに陥るのであった」と述べられるよ

うに、「掃苔」とは、むしろ、著名人ゆかりの地を探訪し、墓碑・建碑の前で故人を回顧するといった文化的行為を指す。

このような掃苔のブームが明治末期から昭和初期にみられた。掃苔雑誌『見ぬ世の友』が明治三十三年六月に東京掃墓会から創刊されたが、それ以前に、「掃苔会」という会が存在していた。[2] 明治四十三年には、京都における墓所集『平安名家墓所一覧』が刊行され、その翌年、宮武外骨が先に触れた暁鐘成『浪華名家墓所集』を再編し、『浪華名家墓所記』を刊行している。また、大正八年には『阿波名家墓所集』の刊行と、各地で墓所集編纂の動きがみられる。さらに、昭和七年十一月には雑誌『掃苔』が創刊され、また、夏目漱石の弟子・藤浪和子が『東京掃苔録』を昭和十五年に刊行している。「掃苔文化」が近世後期から近代にかけて継承されていることがわかる。

近年、記念碑や地誌、また名所・観光地に関する研究が活発になされている。[3] それらは地域社会における史蹟や地誌、名所の意義を検討し、地域結合の契機や外部に対する地域アイデンティティーの表れと発信といった視点で論じられているが、本稿では『摂津名所図会大成』や『浪華名家墓所集』に見られる大坂人顕彰ともいえる墓碑記述が、どのような背景から生まれたのか、「掃苔文化」という視点から名所案内記を検討してみたい。とくに寛政期の『摂津名所図会』と安政期『摂津名所図会大成』の約六十年の間には、墓碑に対する認識の変化があったと推測できるが、『摂津名所図会』刊行前後の明和―享和期に大坂を訪れた人々（とくに江戸の人々）の日記・随筆を手がかりに、明和期から安政期にいたる「掃苔文化」の流れを確認する。

一、池田正樹・大田南畝・曲亭馬琴による訪碑

ここでは、大坂に滞在した三人の来坂者の記録から、墓碑探訪についてみてみたい。明和六年（一七六九年）から安永三年（一七七四年）に大坂に滞在した関宿藩士・池田正樹と、享和元年（一八〇一年）幕府から銅座勤務の命を受け在坂した大田南畝、そして享和二年（一八〇二年）上方旅行で大坂に十日間滞在した曲亭馬琴それぞれの日記・随筆から、大坂における訪碑行為についてみていきたい。

三者の大坂における訪碑状況を示したのが【表1】訪碑対照表である。池田正樹と大田南畝は、それぞれ当時の大坂のガイドブックともいえる地誌を参考に名所を訪れていた（後述）。そのことから【表1】では寛政八年・十年刊行の『摂津名所図会』と安政年間編纂の『摂津名所図会大成』に記された墓・塚などの石碑をもとに三者の訪碑地をあわせて表にしている。ここで注目すべきことは、池田正樹が大坂に滞在した明和・安永初期から大田南畝が滞在する享和元年までの約三十年の間に、大坂における名所案内記の集大成ともいえる『摂津名所図会』が刊行されていることである。『摂津名所図会』が、その刊行後に大坂を巡覧する人々に影響を与えていることは【表1】の南畝の訪碑地が『摂津名所図会』に掲載された地と重なることからも見て取れるだろう。それでは、以下、三者の訪碑についてそれぞれみていきたい。

表1　訪碑対照表

『摂津名所図会大成』（安政年間刊）		『摂津名所図会』（寛政十年刊）		明和六～安永三年	享和元年	享和二年
名　称	場　所	名　称	池田正樹	大田南畝	曲亭馬琴
浅野侯之墓	天王寺寺町吉祥寺	—				
味原正眞墳	味原池	—				
姉川桜・碑	谷町筋寺町妙光寺	—				
安藤正次之墓	平野郷樋尻口	安藤次右衛門正次墓	○			
一心寺戦士墳（本多忠朝墓）	一心寺	一心寺・古墳（本多忠朝墓）	○	○	○
一井鳳梧墓	高津円妙寺	—				
井上国貞墓	谷町筋重願寺	—				
井原西鶴墓	上本町八丁目誓願寺	—			○	○
入江昌喜碑	八丁目中寺町梅松院	—				
鶯塚	北長柄	鶯塚	○	○	○
歌塚	江口	歌塚	○	○	○
江口・西行塔	江口	江口・西行塔	○	○	○
江口君の墓	江口	江口君塚	○	○	○
胞衣塚（秀頼公）	二軒茶屋	—				
胞衣塚	味原池	胞衣塚				
大岡春卜墓	下寺町光明寺	—				
鴛鴦墳	鶴満寺	—				
侠夫朝比奈碑	竹林寺	—				
鬼貫墓	鶴満寺（＊注1）	（鬼貫蹟）				
片山北海碑	八丁目中寺町梅松院	—				
紙治小春の墓	大長寺	—		○	△	
—		萱草塚		△		
家隆卿碑	勝鬘院裏	家隆卿墳	○	○	○	
韓人墓	九條島竹林寺	—				
祇空翁文墳	天王寺寺町鳳林禅寺	—				

義士墳（崇禅寺）	崇禅寺	義士墳（崇禅寺）		○	○
北畠顕家卿墓（大名塚）	阿部野街道	北畠顕家卿墓（大名塚）	○	○	
義童勘太郎碑	千日寺	—			
紀海音墓	上本町八丁目寺町宝樹寺	—			
経墳	阿部野街道	経塚		○	
狂歌墳（鉄格子波丸碑）	高津神社	—			
狂歌墳（蝙蝠軒・玄鳥舎歌碑）	天下茶屋村安養寺	—			
玉雲斎碑	一心寺	—			
曲帯墳（二代目義太夫）	天王寺西門納骨堂裏	—			
供養塔（千人切）	天王寺西門納骨堂裏	—			
契沖阿闍梨碑	東高津餌指町円珠庵	円珠庵契沖阿闍梨碑銘		○	○
契沖母間氏墓	今里村三昧	—			
蒹葭堂墓	小橋寺町大応寺	—			
鯉塚	大長寺	鯉塚		○	
五井蘭洲碑	上本町八丁目実相寺	—			
高台之頌碑	高津神社	高台之頌碑		○	
小町墳	阿部野街道	小町墳	○	△	
小松内府重盛公塔	北田邊村普門寺（＊注2）	（小松重盛開基・法楽寺）			
金剛是則碑	天王寺西門納骨堂裏	—			
三勝之墓	千日三昧荼毘所	—		○	○
紫笛和尚碑	三番村大日寺貞円庵	—			
下河邊長流墓	今里村三昧	—			
十三重石浮図	河堀・般若寺	—			
處士獨嘯庵碑	上野宮・明月林蔵鷺庵	—			
眞阿上人墓	一心寺	—			
薄田隼人碑	下寺町増福寺（＊注3）	（博労淵旧蹟・薄田隼人）		△	
千利休碑	河堀・般若寺	—			
僧聖觀之碑	味原池	—			

大成禅師塔	河堀口清寿院関帝堂	—			
大仁墳	大仁村	大江殿古蹟	○		
鯛屋貞柳蹟	御堂前通雛屋町	油縁斎貞柳蹟			
竹本筑後碑	天王寺超願寺	竹本義太夫墓			
淡々翁二樹二石	難波村瑞龍禅寺	淡々翁墓		○	
淡々翁碑	谷町筋寺町法妙寺	（人物紹介のみ）		○	△
近松門左衛門墓	天王寺寺町吉祥寺	—			
朝鮮石界墻	高津植木屋吉助・菩提庵	—			
貞柳終焉地	天下茶屋村安養寺	—			
貞柳翁之柳（碑）	天保山東麓	—			
天保山之碑	天王寺西門納骨堂裏	（人物紹介のみ）			
豊竹若太夫碑	産湯稲荷社司宅	—			
獨吟墳	上本町八丁目誓願寺	—		○	
中井甃菴墓	下寺町良運院	—			
中村白翁墓	天王寺西門納骨堂傍	—			
並木五瓶碑	千日寺	—			○
並木正三碑	下寺町大蓮寺	—			
西澤一鳳墓	西天満寺町西福寺	西山宗因墓			
西山宗因墳	野田村	二十一人討死由緒地			
廿一人討死由緒地	天満同心町の東	僧日羅塚			
日羅墳	塚本村	如来塚			
如来塚	滓上江村	鵺塚		○	
鵺塚	一心寺（＊注4）	（来山蹟）			
俳師来山碑	住吉斯香神社傍	—			
柱形之碑（蜀山人狂歌）	下寺町遊行寺	芭蕉翁碑		○	
芭蕉翁碑	難波村瑞龍禅寺	—			
芭蕉翁碣	天王寺寺町国恩寺	—			
蜂須賀家塔					

播磨墳	阿部野街道	播磨墳		○		
筆墳	天満宮御旅所	—				
古林見宜墓	高津円妙寺	医生見宜堂				
寶晉斎碣（宝井其角）	難波村瑞龍禅寺	—				
松虫墳	阿部野街道	松虫塚		○		
源頼光箭文墳	産湯稲荷社司宅	—		○		
道邊之柳	天王寺寺町吉祥寺	—	○			
矢頭長助墓	上福島浄祐寺	—				
夕霧墳	下寺町大蓮寺	—		○	○	
油烟斎墓	蛇坂光傳寺	—				
油烟斎・新碑	蛇坂光傳寺	—				
由縁斎貞柳碑	有栖山清水寺	油縁斎貞柳碑				
椀久墓	上本町八丁目実相寺	—				△

石碑・塚など何らかの形ある築造物として存在するもののみ取り上げた。
基本的に『摂津名所図会大成』の読みに従って50音順に入力。場所も同書の記述に従ったが、相違がみられたものは、以下の注記に『摂津名所図会』の場所記述をあげる。（＊注1）福島（＊注2）南田邊（＊注3）長堀高橋新平野町（＊注4）今宮村。以上は関連の旧蹟のみで碑はなし。
○は訪碑、△は実際には訪れなかったが記述があるもの。

（一）池田正樹の訪碑

池田正樹は、多治比郁夫氏執筆の『難波噺』解題によると、[4] 下総国関宿藩久世出雲守広明の家臣。明和六年九月、藩主が大坂城代に任命され、藩主に従い来坂する。その在坂中の見聞録を『難波噺』として執筆している。『難波噺』は十巻十冊の写本で、明和六年十一月四日の江戸出立に起筆し、安永三年十二月までの五年二ヶ月の記録である。正樹は父母とともに着坂（母は明和七年大坂で没）し、安永二年には在坂のまま家督を相続している。『難波噺』には、正樹の在坂中の名所旧跡見物や芝居見物が記され、また木村蒹葭堂のもとに何度か足を運び談話した様子も記されている。[5] その序文に「今、世の中をわたりくらべて知るといふも、古歌に似たるやうなれども、夫は昔し心ある人の詠とかや。予ハ故郷を別れて遠く来りしかひに、せめてみてのミや人にかたらんと思ふ」とあるよう、古歌からその地（名所）を判断するのではなく、自分自身が今、実際に見聞きしたことを記そうとした見聞録である。

では、正樹の訪碑地についてみてみよう。正樹の掃苔を順にあげると以下の通りである。なお〈　〉内に一日の主な巡覧先を記した（以下、大田南畝・曲亭馬琴も同じ）。

明和八年（一七七一）
三月一日〈垣内氏同道　四天王寺→阿部野街道→万代の池→住吉〉
　北畠顕家卿の墓、小町塚
三月二十四日〈巡覧先不明〉
　家隆卿の墓
四月二十八日〈平野→葛井寺参詣→誉田八幡→道明寺→玉手山〉
　平野・安藤治右衛門公石塔、道明寺途中・後藤又兵衛墓
明和九年（一七七二）
四月二十六日〈江口〉
　鶯塚、江口村・石碑、西行塔、遊女の墓
六月二日〈巡覧先不明〉
　下寺町浄国寺・夕霧墓
九月六日[6]〈一心寺→中寺町正法寺〉
　一心寺・本多雲州侯の碑、家士の墓、法然上人の墓、
　中寺町正法寺・雁金文七、極印屋千右衛門墓
安永二年（一七七三）
三月晦日〈大仁村〉
　大仁村・王仁塚
安永三年（一七七四）
五月一日〈村井氏・鈴木氏同道　野崎観音→四条畷〉
　河内国四条畷・楠正行碑、雁塚
訪碑日不明
　河内国若江村・木村長門守碑、山口伊豆守碑

ここであげたのは正樹が見物した墓碑・塚だけであるが、巡覧の折はもちろん寺社などの名所もあわせて見物している。名所見物の途中で自分が見た墓碑について記録するが、中には墓碑の図を描くものもある。正樹が見た墓碑は、鎌倉前期の歌人で『新古今和歌集』の選者の一人である藤原家隆の墓や、「大名塚」といわれる南朝の公卿・北畠顕家卿の墓、四条畷の古戦場では楠木正行の碑を見物している。また、大坂夏の陣で戦死した安藤治右衛門、同じく本多忠朝の墓や、豊臣方の後藤又兵衛墓、若江の木村重成の墓、山口伊豆守重信の墓も見物している。また、実際には訪れていないが「塙團右衛門塚、泉州下樫井町北の端に有。（略）事ハ砕玉話後篇に見ゆ。濱野氏云、右塚の近所に淡ノ輪六郎兵衛墓有」と夏の陣・樫井合戦の史跡や矢田郡坂本村の水戸光圀が再建した楠木正成の墓、平清盛・重盛の石塔など、書物や人から聞いた墓碑の情報も記述している。正樹の訪碑地は、阿部野街道沿いの古塚や、鎌倉・南北朝期の伝承をもつ塚、また大坂の陣の戦跡における武将の墓の見物が主であった。その他は謡曲「江口」で知られる江口村で西行の塔・遊女妙の墓を見物し、大坂新町の名妓夕霧の墓も見物している。

次に、正樹の訪碑状況をみてみよう。

五月朔日、村井氏、鈴木氏を伴ひ、朝四ツ時前宿を出、河州野崎観音大坂より三里也まで参詣す。（略）それより同国四條縄手にいたり、楠正行の碑此所古戦場、又此邊をかりや村と云を見たり。（略）碑のかたち左に図す。（図略）爰も又四條なれバ、みやこどをりのむかしを思ひ、いざこと、はんと賤家に立より、此ほとりに正時の碑のありやなしやと尋侍りしに、さだかに答ふる人だになし。されどこ、はかりや村、あれなる碑より北にあたりて鴈塚のあるよ

しいへるゆへ尋求めしに、堤のうへに碑有。鴈塔と刻める碑文あり。爰に略す。碑の形左に図す。（図略）又今の塔ハ寛延年中に再建したりしとぞ。庄野氏云。河州に四條縄手といふ所三ヶ所有。其地ごとに楠氏の墓といふものありと。予云、然れども今かりや村に有碑を正行の碑とす。

（『難波噺』後篇巻之五・安永三年五月朔日）

河内国四条畷の楠木正行の古戦場跡を見物後、正行の墓が他にもあると聞かされた正樹は「予云、然れども今かりや村に有碑を正行の碑とす」と自分が見物した碑が本当の正行の碑であると主張している。楠木正行の墓が苅谷村にあるという情報は『河内志』（享保二十年刊）にみられ、正樹は地誌の情報を信頼していたと思われる。

（二）大田南畝の訪碑

幕臣であり、狂歌師・戯作者の大田南畝は享和元年、大坂の銅座勤務の命を受け、三月十一日に着坂、南本町五丁目の通称米屋町に旅宿して一年間大坂に滞在している。滞在中の大坂巡覧の様子は、南畝著作の日記『蘆の若葉』（写本）から知ることができる。一年間の滞在中、四天王寺や住吉といった大坂を代表する名所に何度か足を運び、また各社の夏祭り、紅葉見物といった四季の風物を楽しんでいるが、特に滞在後半には、文芸の友を得て遊覧・聯句の催しに参加している。[7] 以下にその訪碑地をあげてみよう。

享和元年（一八〇一）

三月二十二日〈道頓堀→法善寺→千日墓所→難波村・瑞竜寺〉

法善寺・浄瑠璃太夫の墓、蟻鳳墓、千日墓所・行基菩薩開基の石碑、相撲取などの墓、瑞竜寺・淡々翁の墓、芭蕉塚

三月二十五日〈野田の藤→春日社→妙徳寺（五百羅漢）→久安寺→了徳院→梅田墓所→曽根崎新地→法清寺→神明宮→大融寺〉

野田春日社・足利将軍義詮公の碑、曽路利由緒庵の碑、法清寺・遊女かしく墓

三月二十六日〈真言坂生玉九ヶ院→弁天社→生玉神社→月江寺→四天王寺→一心寺→新清水寺→勝曼院→浄国寺〉

月江寺・しゃみせん塚、宗因四世勃翁墓、一心寺・本多忠朝墓、家隆卿墓、浄国寺・夕霧墓

三月二十九日〈高津神社→円珠庵〉

高津社・高台之頌碑、円珠庵・契沖墓

四月五日〈天満天神社→九昌院→源八渡→母恩寺→大長寺→内平野神明宮〉

鵺塚、大長寺・鯉塚、紙屋治兵衛・紀伊国屋小春墓

四月八日〈孔雀茶屋→遊行寺→合法が辻→四天王寺（灌仏会）→茶臼山→安井天神→新清水〉

遊行寺・芭蕉翁墓、新清水坂下・油煙斎貞柳墓、一本亭芙蓉花碑

四月十四日〈三津八幡宮→難波村・牛頭天王社→瑞竜寺→千日・法善寺〉

法善寺・三勝墓、竹本播磨少掾（二代目義太夫）墓

四月二十一日〈森宮→仁徳天皇宮→宰相山・三光宮→小橋寺町→誓願寺〉

誓願寺・中井甃庵墓、西鶴墓

五月五日　〈長柄村→薬師堂村・源立寺（自楽法師を訪問）→崇禅寺→江口の君堂〉

鶯塚、崇禅寺・義士墓、江口・君塚、西行塚、歌塚

五月二十日　〈難波御堂の御座敷見物〉

難波御堂・椀久手水鉢

七月七日　〈お茶湯地蔵→玉造豊津稲生社→仁徳天皇宮→姫古曽社→舎利寺→河堀口→逢阪の清水〉

頼光矢文塚、胞衣墳

九月三日　〈毘沙門堂→佐伯宅訪問→阿部野道→万代池→難波屋の松→堺・妙国寺など堺巡覧〉

松虫塚、北畠顕家卿墓、播磨塚、（小町塚・萱草塚は見過ごす）

日記の書き出しは着坂十日後の三月二十一日から始まるが、その日は難波御堂（南御堂）・座摩神社・津村御坊（北御堂）・御霊社と、早速、市中の主な寺社を見物している。墓碑記述が出てくるのはその翌日からであり、訪碑活動は滞在の前半期に多く見られる。南畝の訪碑傾向は池田正樹が訪れた謡曲の舞台である江口や古塚も訪れるが、[8]【表1】からも『摂津名所図会』掲載の墓碑・塚を主に見物しているといえよう。また、南畝は『摂陽群談』『難波丸』『難波鑑』『畿内治河記』『泉州志』『堺鑑』などの地誌を利用していたことが知られるが、[9]【表2】にみるように『摂津名所図会』の引用回数が格段に多く、刊行されてまだ間もない『摂津名所図会』を頻繁に利用し、訪碑の手引きとしていたようである。

次に、南畝の訪碑に対する姿勢がうかがえる記述をみてみよう。

表2　『蘆の若葉』における地誌・名所案内記の引用

No	書　名	引用回数	刊行年	西暦	著　者
1	**名所図会（摂津名所図会）**	**16**	寛政8・10年	1798	秋里籬島
2	摂陽群談	6	元禄11年	1701	岡田溪志
3	難波丸（改定増補難波丸綱目）	5	延享5年	1748	志田垣与助
4	**名勝図会**	**3**	—	—	—
5	畿内治河記	2	—	—	新井白石
6	難波鑑	2	延宝8年	1680	一無軒道冶
7	堺鑑	1	貞享元年	1684	衣笠一閑
8	**四天王寺法筵略記**	**1**	—	—	—
9	**住吉詣の記**	**1**	—	—	—
10	泉州志	1	元禄13年	1700	石橋直之
11	浪花の梅（狂歌絵本浪花のむめ）	1	寛政11年	1799	白縁斎梅好
12	みをつくし	1	寛政10年	1798	浪華散人
	摂津名所図会引用合計	**21**			

『蘆の若葉』で南畝があげた地誌・名所案内記の使用回数をあげた。但し、南畝による記入と断定できない欄外書き入れの書名はその対象としない。
書名No1「名所図会」は、その記述内容から『摂津名所図会』である。
書名No4「名勝図会」については、『住吉名勝図会』が寛政6年に刊行されているが、南畝の引用文との照合により『摂津名所図会』であると判断した。また書名 No. 8、No. 9 については『摂津名所図会』がこの2書を引用していることから、これらについても南畝は『摂津名所図会』を参照していると考え、最終的に合計としてカウントした。

浄国寺といふ寺に遊女夕霧が墓ありといふ事、かねてきゝつれば、とある家のかどにたてる女にとふに、浄国寺はいづこにやといへば、むかひなる二軒めの寺こそそれなれといふに、例の事このむ癖やみがたくたちいりてみれば、堂の左の方の墓の中にあり。

（『蘆の若葉』三月二十六日）

鳥居の前（四天王寺）に下馬の石表たてり。うらに寛永十四丁丑年閏三月十五日と、ほのかにみゆ。（『蘆の若葉』三月二十六日）

「例の事このむ癖」とあるように、南畝の「掃苔家」ぶりがうかがえるが、四天王寺参詣の記述にみられるように、墓碑だけでなく、石碑と見るや側に近寄って観察し、『摂津名所図会』に紹介されていない石碑についても積極的に観察している。

訪碑の中でも特徴的なのは、芭蕉（元禄七年大坂で没）をはじめ、狂歌師・油煙斎貞柳の墓（享保十九年没）、俳諧師・半時庵淡々の墓（宝暦十一年没）等を訪れ、さらに契沖（元禄十四年没）や西鶴の墓（元禄六年没）など四十年前から百年前に大坂で没した文芸人の墓碑に注目していることである。以下にその様子をみてみよう。

まず、三月二十六日の巡覧の様子である。

夫より真成院・遍照院をへて曼荼羅院にいたる。契沖法師の住職し給へる所ときけば、そのみはかをとはまほしく、堂のうしろの墓所にいりて見めぐらすに、みえず。此所は地狭くして、堂の緑の下に石塔多くたてたり。たづねわびて寺僧にとふに、いかにもこゝに住職はし給へれど、其墓は小橋の円珠庵にありて、水戸家よりたてられし石碑ありとかたる。名所図会を按ずるに、東高津町餌指町といふ所に、契沖の墓ありと云。重てたづぬべし。

契沖が住持していた曼荼羅院で墓碑を探す南畝であったが、住職から墓は円珠庵にあるとの情報を得、さらに名所図会で確認し、「重てたづぬべし」としている。南畝が円珠庵を訪れるのはその三日後の二十九日である。

餌指町といふ所に、円珠庵あり。こゝに契沖法師の墓ありとき、て立いりたるに、庭に井あり。井の辺に塔婆あり。水戸義公契沖阿闍梨百回忌としるせり。庭の戸口はとざして側に五井何某のたてる碑あり。契沖法師の行状をしるせり。庵主にとふに、契沖法師の墓はいづこといへば、一ツの老尼出来りて、案内して扉をひらく。つぼのうちの草木もたゞならぬ心地するに、蒲公英の花さき出たり。左に四阿（アヅマヤ）あり。奥の方に墓あり。契沖阿闍梨墓と記せり。抑阿闍梨の事は、はじめて勢語臆断をよみしより、其説のひろき、其論の卓なる事をしれり。そのゝち万葉代匠記・古今余材抄のはしつかたをうかゞひ、河社・雑記・雑々記のくさぐさまでその下風をしたひ、猶も安藤為章の年山記聞をよみて其伝をしる事を得たり。けふいかなる因縁ありて、此みはがりにまうづる事を得たると思ふに、涙まづ落ぬべし。（略）法師の影像の前にぬかづき、机上に香資をさゝげて帰りぬ。

（『蘆の若葉』三月二十九日）

南畝は『摂津名所図会』の情報を主に利用して訪碑しているが、このように『勢語臆断』など契沖の著した書物や、契沖の行実を掲載した安藤為章の『年山記聞』を読んで、高い知識を持ち、また個人的な情をもって訪碑していたことがわかる。

（三）曲亭馬琴の訪碑

江戸の戯作者である曲亭馬琴は、享和二年、上方旅行で大坂を訪れた。馬琴が来坂する一年前に在坂し、大坂で文芸の友を得ていた大田南畝から、浄土真宗常元寺住持・順宣律師、医師・馬田昌調（天洋）、婦人科医・佐伯重甫（蕪坊）、田宮仲宣（盧橘庵）を紹介してもらい[10]、名所巡覧の折りには盧橘（盧橘庵）こと田宮仲宣が同道している。田宮仲宣は雑識家・文筆家であり、南畝との京坂市井風俗についての問答書『所以者何』の答者である。

馬琴の大坂巡覧は洪水の影響を受け、他の二人に比べて巡覧場所は少ないが、七月二十四日から八月五日までの十日間という短期間にも関わらず、法善寺・天満天神・座摩社・天王寺（四天王寺の堂塔は享和元年十二月の火災により消失）・新清水寺・生玉明神社・高津社・一心寺・住吉と、この時期の大坂の主な名所を巡覧している。旅行中の見聞は『羇旅漫録』にまとめられたが、さらに『蓑笠雨談』と題して編纂し、享和四年に刊行している（後に改題『著作堂一夕話』弘化五年刊）。『羇旅漫録』崖言から解説すると「古人の略伝、墓誌、珍書、風俗の異体、方言、妓院、雑劇、年中行事の異同、名所古迹、古人の墨跡等」を記し、「序（ついで）を得ず一覧せずといへども、その処を探得たる古墳等はしるせるもあり」と、旅行中に見聞したこと、また、実際に見ることのできなかった古人の墓所なども記述している。『羇旅漫録』、『著作堂一夕話』をもとに馬琴の墓碑探訪を抜き出してみよう。

享和二年（一八〇二）

七月二十七日　〈盧橘同道　千日〉

千日寺前・種々の墓（河豚をくらひて死したる人の墓・博徒の墓）、乞食女六が墓、美濃屋三勝墓

七月二十八日〈大坂御城大手先徘徊→天満天神（淀屋辰五郎奉納の手水鉢は見得ず）→座摩社〉

七月晦日　〈盧橘同道にて古墓探訪　生玉明神・高津社・一心寺〉

誓願寺・西鶴墓、下寺町浄国寺・夕霧墓、一心寺・本多忠朝墓

その他探訪日不明

法善寺・二代目竹本義太夫墓、並木正三（初代）墓

二十七日探訪か

円珠庵・契沖墓、家隆卿の碑、新清水下・鯛屋貞柳（油煙斎）碑

晦日探訪か

難波御堂・椀久（椀屋久右衛門）奉納の手水鉢

またその他に、実際に訪れることはできなかったが、近松門左衛門の『心中天網島』の題材となった大長寺の紙屋治兵衛・小春の墓、寺町実相寺の椀久の墓、戦国時代・堺の茶人である武野紹鷗と千家の墓や、江戸前期の豪商で、闕所処分をうけた淀屋辰五郎奉納の手水鉢についてもその場所を記述している。

馬琴にとって大坂における訪碑は、「大坂にてよきもの三ツ。良賈（オホアキヒト）、海魚、石塔」（『羇旅漫録』〔百四〕大坂市中の総評）と述べるように、石塔、すなわち墓碑は印象深いものであった。また「盧橘と同道にて古墓をたづぬ」と記していることからも、古人の墓碑探訪を大坂市中巡覧の一目的としていた。訪碑の際には南畝に紹介された田

宮仲宣を案内役にしていたようであるが、次にみるように同道の盧橘だけでなく、盧橘と同じく南畝と交流のあった泉屋雨柳（泉屋真兵衛・銅の問丸）[11]からも度々情報を得ている。

泉屋雨柳の話に。椀久が墓は大坂八丁目寺町実相寺本堂東南の方にあり。墓誌　宗達之墓（略）延宝年中に没しぬ。墓の傍に松ありといふ。予このことを大坂出立の朝きゝぬ。ゆゑに実相寺にたづねゆきてうつし来ることを得ず。尤うらみとす。

（『羇旅漫録』〔九十二〕椀久奉納の手水鉢）

淀屋辰五郎が奉納の手水鉢。天満天神の華表の傍にあるよし雨柳の話なり。予天満へ参りし日はこの事をしらず。大坂出立の日に聞ぬ。故に終にうつし来らず。椀久が墓と辰五郎が奉納の手水鉢を見ざること。旅中の遺恨なり。この手水鉢のことその後大坂木津屋政五郎に消息して穿鑿せしに。絶てなしといへり。木津屋は天満の人にて。神人としたしく交れば聞もらせしにはあるべからず。

（『羇旅漫録』〔九十六〕淀屋辰五郎奉納の手水鉢の噂）

「椀久が墓と辰五郎が奉納の手水鉢を見ざること。旅中の遺恨なり」と述べ、それらを見物できなかったことを悔やんでいる。また淀屋辰五郎の手水鉢については、木津屋政五郎に探索を依頼し、後日情報を得ていた。馬琴が石碑に執着していた様子は次の文章からもうかがえる。

椀久が奉納の手水鉢は。大坂東門跡かけしよ書院の庭にあり。所縁あらざるものは見がたし。大坂の人もしらざるもの多かりしに去年杏花翁はじめて見出さる。これよりして人これをしりぬ。今書院普請最中なり。庭あれて手水鉢叢の中にあり。則ちこれを摺るに石面あらいしなれば墨つかず。もんじおぼろげなり。もつともうらむべし。

（『羇旅漫録』〔九十二〕椀久奉納の手水鉢）

「椀久」は大坂堺筋の町人椀屋久右衛門。遊興から破滅の一途をたどった顚末は、西鶴の浮世草子『椀久一世の物語』として貞享二年（一六八五年）に刊行されており、また貞享元年の大和屋甚兵衛による椀久狂言をはじめ、以後歌舞伎・浄瑠璃などで椀久ものとして芝居の題材になっている人物である。馬琴は「これを摺るに石面あらいしなれば墨つかず」と苦労しながら手水鉢の拓本を取っており、帰京後は「予墨本として山東主人におくる」と、山東京伝にその墨本をおくっている。[12]

（四）小括

以上、明和・安永期の池田正樹、享和期の大田南畝・曲亭馬琴の訪碑状況をみてきた。池田正樹の訪碑地は、大坂市中とその郊外、また和泉・河内にまでおよぶものであるが、大坂夏の陣の戦跡巡りや古塚巡りが主であった。南畝は『摂津名所図会』を手引きに記載の場所を巡覧しており、またさらに、自分の知識が掃苔のベースとなっていることがうかがえる。南畝・馬琴ともに文芸に関わる性格からか、大坂文芸界の先人の墓や芝居の題材となった人物の墓をも訪れていることがわかった。

また、それぞれが大坂の名所を案内した出版物を参考にしていることも注目すべきであろう。池田正樹は大坂の名所見物にあたって『摂陽群談』（元禄十一年刊）や『和漢三才図会』（正徳二年自序）、『摂津志』（享保二十年）や『難波丸』（『改訂増補難波丸綱目』延享五年刊）

などの地誌を情報源にしており、[13] 南畝の記述にも『摂津名所図会』（寛政八年・十年）をはじめ『摂陽群談』や『摂津志』、『難波丸』ほか『難波鑑』（延宝八年刊）、『畿内治河記』『泉州志』『堺鑑』がみえる。今回詳細には検討できなかったが、訪碑行為はこのような地誌・名所案内記に影響を受けていたといえるであろう。

二、来坂者による探訪と発見

池田正樹、大田南畝、曲亭馬琴の訪碑状況を上記にみた。その訪碑行為は地誌や名所案内記の影響を受けつつ、その一方で、地誌や名所案内記に情報が記されていない場合も、自分の知識に即して墓碑を探訪している例もみられる。

先述の馬琴による椀久奉納手水鉢の記事には「大坂の人もしらざるもの多かりしに去年杏花翁（南畝）はじめて見出さる。これよりして人これをしりぬ」とあり、馬琴訪碑の一年前に大田南畝が「発見」したものであった。南畝『蘆の若葉』の記述を見ると以下のようにある。

廿日　陰　小雨

難波の御堂の御座敷みんとてゆく。御堂の役人原田瀬兵衛といふに案内して、（略）此書院の前なる石の手水鉢に銘あり。

正保三年

椀屋久右衛門

寄進

十二月九日

とあり。此椀屋久右衛門は、松山といへる遊女になじみて身をはたせり。世にいはゆる椀久なり。長さ七尺四五寸、はゞ三尺余ともみゆる四角なる手水鉢なり。

（『蘆の若葉』享和元年五月二十日）

この手水鉢は、椀久の父親、つまり先代の椀屋久右衛門の奉納であることを後に馬琴が記しているが、[14] 江戸から来た南畝や馬琴が土地の人間も認識していない椀久の手水鉢に注目していることが興味深い。さらに、来坂者による大坂著名人墓碑探訪をみてみよう。

七月晦日盧橘と同道にて古墓をたづぬ。はからず西鶴が墓に謁す。寺僧もこれをしらざりし様子なり。花筒に花あり。寺の男に何ものが手向けたると問ふに、無縁の墓へは寺より折々花をたつるといふ。

（『羇旅漫録』〔九十一〕西鶴が墓誌）

二代め義太夫が墓は千日寺にあり。則国字を以て略伝をしるせり。文中に元祖義太夫が伝も少しのせたり。（略）元祖義太夫が墓はしる人なし。予正三を訪ふて近松が墓所を問ふに正三もしらず。

（『羇旅漫録』〔九十〕近松門左衛門が伝）

井原西鶴・竹本義太夫・近松門左衛門の墓についての馬琴の記述であるが、寺町の誓願寺にある西鶴の墓は寺僧にもそれと知られてはいなかった。初代義太夫の墓については、実際は『摂津名所図会』巻二で、聖徳太子が経を納めたという「土塔宮古跡」の項目の末尾に「竹本義太夫の墓　此寺にあり」と短く情報が記されている。しかし、馬琴が「元祖義太夫が墓はしる人なし」とするように名所図会に掲載されていても、一般には認識されていなかった。また、狂言作者である二代目並木正三も近松の墓の所在を知らなかったようである。馬琴訪

碑時点で近松門左衛門の墓が実際に建立されていたかどうかは分からないが、世間一般、また文芸の世界に身を置くものにとっても、近松の墓や義太夫に注目し、積極的に認識する向きがなかったといえよう。

ここで【表1】を再度確認したい。寛政八年・十年刊の『摂津名所図会』には、近松門左衛門や井原西鶴の墓については記述がなく、馬琴の記録にあるように、近松の墓については所在を知ることはできなかった。しかし安政年間の『摂津名所図会大成』には近松の墓をはじめ、西鶴の墓などの墓碑が多数記されている。馬琴の在坂当時には注目されていなかった近松の墓、また認識が薄かった初代竹本義太夫の墓や西鶴の墓は、五十年余り後の『摂津名所図会大成』にははっきり見ることができる。この五十年余りの間に、これらの墓が発見されたのか、またその後に建立されたのか本論では検討できないが、南畝や馬琴の訪碑行為を含め、寛政の『摂津名所図会』刊行と安政の『摂津名所図会大成』の間に、このような墓碑に注目する契機が生まれる何らかの変化があったとみたい。

三、おわりに

以上、明和・安永期から享和期に大坂を訪れた池田正樹・大田南畝・曲亭馬琴の記録から、その訪碑行為を引き出し検討した。結論を要約すれば、第一に『摂津名所図会』刊行前後の掃苔行為からは、『摂津名所図会』が掃苔行為に影響を与えていたことを指摘した。安永九年（一七八〇年）には名所図会ものの嚆矢『都名所図会』が刊行され、その摂津国版として『摂津名所図会』が寛政八年・十年に刊行されたほか、安永期から寛政期は、大坂における地誌出版の流れの中では第二次の隆盛期にあった。正樹と南畝・馬琴の間には「名所図会」刊行という出版界の大きな画期があるが、彼らは名所巡覧への関心が高まる時期に在坂し、名所巡覧や掃苔をおこなったのである。

第二に、寛政期の『摂津名所図会』と安政期の『摂津名所図会大成』の間には、墓碑が注目されるような「掃苔文化」の変化があったとみるが、その間の動きとして、大坂では積極的に認識されていない墓碑が、江戸からの来訪者によって注目されていたことがわかった。これは地域の外からの来訪した人の知識や興味、すなわち「外部からの視線」が、地域における墓碑認識の契機となり得ることを示している。

このような外部からの注目が地域の中でどのように展開し、安政期の『摂津名所図会大成』や『浪華名家墓所集』の編纂に繋がったのかは今後の課題としたい。

注

（1）長友千代治「暁鐘成」（『近世上方作家・書肆研究』東京堂出版、一九九四年）。

（2）川崎市蔵「明治の掃苔家　林旧竹」（『日本古書通信』第六六二号、一九八四年九月）。

（3）青木美智男「地域文化の生成」（『岩波講座日本通史15近世5』岩波書店、一九九五年）。
羽賀祥二『史蹟論―十九世紀日本の地域社会と歴史意識―』名古屋大学出版会、一九九八年。
櫻井進「分裂する江戸の無意識」（別冊宝島編集部編『江戸の真実』

宝島社、二〇〇〇年。
青柳周一『富岳旅百景―観光地域史の試み―』角川書店、二〇〇二年。
青柳周一「近世後期の絵図・地誌作成と「旅行文化」―近江の旅行史関係史料から―」(『民衆史研究』第六十七号、二〇〇四年)。
　青柳氏は「観光地化」のプロセスを地域の立場から検討し、また旅行者が地域に及ぼす影響について指摘している。
白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版、二〇〇四年。
(4) 多治比郁夫「難波噺解題」(『随筆百花苑』第十四巻、中央公論社、一九八一年、四二三～四二六頁)。
(5) 木村蒹葭堂と池田正樹の談話については、中村真一郎『木村蒹葭堂のサロン』新潮社、二〇〇〇年、にまとめられている。
(6) 引用本には「十月六日」とあるが、前後の記述より九月六日の誤りと判断した。
(7) 飯倉洋一「大田南畝の在阪生活」(高田衛編『共同研究秋成とその時代』勉誠社、一九九四年、一五五頁)。
(8) 大田南畝『杏園間筆』(享和二年～文化六年)の河内・朝鮮西瓜の一話には「池田氏、難波話に見ゆ」とあり、南畝は池田正樹の『難波噺』を読んでいたようである。また、南畝『一話一言』巻一(安永四年～七年に執筆)には、「本多出雲守并家来討死の石塔」として一心寺の本多忠朝の石碑を図入りで記し、図中に「池田正樹」、文末に「菊池翁記」とあり、来坂以前に正樹の『難波噺』から大坂の情報を得ていた。
(9) 「解説・蘆の若葉」(『大田南畝全集』第八巻、岩波書店、一九八六年、七〇三頁)。
(10) 書簡四十三「五月六日常元寺・馬田昌調・佐伯重甫・田宮由蔵(仲宣)宛」(『大田南畝全集』第十九巻、岩波書店、一九八九年、七六～七七頁)。
(11) 『蘆の若葉』(『大田南畝全集』第八巻、岩波書店、一九八六年、二五六頁)。
(12) 『著作堂一夕話』(『日本随筆大成』〈第一期〉一〇、吉川弘文館、一九七五年、三六四頁)。
(13) 渡邊忠司『大坂見聞録』東方出版、二〇〇一年、二二頁)。
(14) 曲亭馬琴「返魂餘紙別集」に「或人云、こは嫖客の名だゝる椀久にはあるべからず、その親の椀久が寄進せしものならんといへり。歳月を推し考ふればさもあるべし」とある。(木崎愛吉『大日本金石史』第五巻、歴史図書社、一九七二年より)。

引用史料

『難波噺』(『随筆百花苑』第十四巻、中央公論社、一九八一年)。
『蘆の若葉』(『大田南畝全集』第八巻、岩波書店、一九八六年)。
『羇旅漫録』(『日本随筆大成』〈第一期〉一、吉川弘文館、一九九三年)。
『著作堂一夕話』(『日本随筆大成』〈第一期〉十、吉川弘文館、一九七五年)。
『摂津名所図会大成』(『浪速叢書』巻七、巻八、名著出版、一九七八年)。

(関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程[redacted])